広島大学公開講座についておもうこと

工学部　大　森　正　信

1．はじめに

工学部選出の若いフォーラム編集委員（筆者はまだ顔を知らない）から広大公開講座について何か書くようにと電話で命じられた。電話の声にまともな抵抗もせずに仕事をおしつけられてしまった自分のふがいなさを合理化するために，筆者自身の勉強という名目で書くことにした。

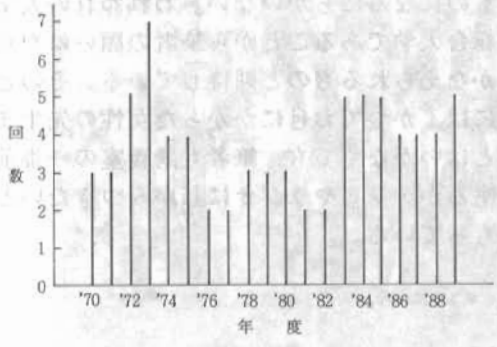

図1　広島大学公開講座の年次別開催回数

大学が地域に開かれた存在であるべきだ（こういう言い方は多分に誤解をまねく）ということが強調されだしたのは20年ほど前からのことである。広島大学でもそのような空気の中で「広島大学エクステンション事業委員会」を発足させ，その規程（7条からなる）を1971年（昭和46年）4月13日に制定している。エクステンション事業として開放講座と施設の利用（今日いうところの公開講座）を行うと第2条に書かれている。

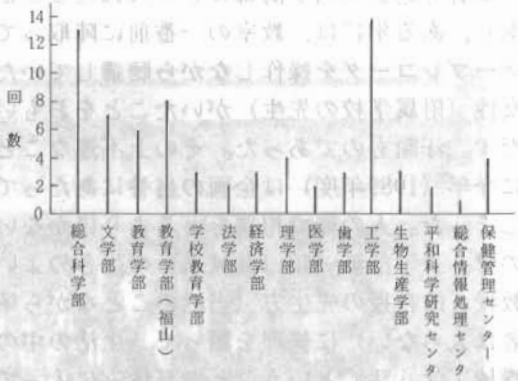

図2　各学部などが企画・担当した公開講座の回数

2．公開講座のあしどり

記録によると，はじめて公開講座が開かれたのは事業委員会規程ができる前の年度の1970年度（昭和45年度）で，それらの講座は教育学部，工学部および総合情報処理センターがそれぞれ担当したものであった。講座開催実績を示すと図1と2のようになる。図1は大学全体の年度別開催回数，図2は各学部など別企画・担当回数である。開催回数は全体で75回におよび年平均3.75回になる。この数年間は毎年4，5回開かれている。表2をみると総合科学部と工学部の担当回数がきわだって多い。筆者の属する工学部の担当回数が多い理由は，東広島市の教育委員会が熱心で毎年西条所在学部である工学部に講座開催を強く希望してきたからであって，工学部構成員がとくに公開講座好きだということではない。

講座は特定の会場（おもに大学の講義室）で講義（場合によれば実技指導）する形式と

ラジオまたはテレビを利用して講義する形式の二通りで行われている。一回の受講者数を100人とすると，いままでにざっと延べ7,500人が受講した勘定になる。放送利用の講座で受講申込みせずに聴講した人がいくらかいたとすると，いままでの全受講者は8,000人を越えているかもしれない。

3．公開講座の意義

筆者も過去何回か講師にさせられたことがあり，ある年には，教室の一番前に陣取ってテープレコーダを操作しながら聴講していた女性（附属学校の先生）がいたことをおもいだす。汗顔ものであった。その上不運なことに今年（1989年度）は企画の当番にあたってしまった。人の褌で相撲をとるよりほかないので，工学部第一類（機械系）の生きのよい教授・助教授の先生方（当然のことながら筆者は入らない）に無理を願って「生活の中の機械工学八話」ということで夏休みに入って講義をしていただいた。それぞれの講師が用意したレジュメは第一級のもので，それらをまとめたテキストは多少手を加えればユニークな機械工学概論とでもいえる教科書になるようなものであった。あらためていくつかの学部の先生方が過去に作ったテキストを見させていただいたが，そのときにも同じような感じをもった。このことは，受講者がある程度腰をすえて公開講座を聴講すれば彼らの得るところがきわめて大きいものになるにちがいないことを物語っている。そのようなわけで，われわれが続けてきている公開講座は質的に十分自慢できるものであることをあらためて認識させられた。

4．おわりに

よりくわしく過去の例をしらべると個別科学や個別問題をとりあげているものが圧倒的に多いのに気づく。それはそれとしてよいのだけれども，ときにはもっと包括的なテーマ（科学論，社会論，文明論に類するような）の講座が企画されれば有難いとおもう。今日の激動する世界の中で生きているわれわれにとって，そのような種類の講座は示唆に富んだものになるにちがいない。われわれの大学が総合大学であることから筆者の願いはやがてかなえられるものと期待している。そのときには，かつてお目にかかった女性の先生までとはいかなくても，筆者も講義室の一番前に座るかテレビやラジオにしがみつきたいとおもっている。